OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

研究ノート

大塚史学雑感[1]

家名田 克 男

本稿は一応「研究ノート」と銘うってはいるが，残念ながら実質は「読書メモ」といった程度のものでしかない。また雑「観」でなく雑「感」であることも遺憾としたい。大塚史学が日本の経済史研究において前後未曽有といえる程の豊かなそして優れた成果であるのに，私の様な自他ともに許す三等教師がこれに対してとかくの議論をなすなどということは，決して見よいこととは思われない。にも拘らずこの様な題を掲げて小文を草する所以のものは，大塚史学が経済史の研究成果たるに止らず，戦後日本の思潮の中においても重要な位置と意義を保持しているからに他ならない。とにかく50年以上にもわたって絶えざる精進を重ねて来られた学界の大先達に対して文字通り渺たる後学に過ぎぬ私如きが散慢な議論をなすなど，全く如何かとも思う。しかし極く微小とはいえ一個の人間存在としての私という立場に立つならば，如何に偉なりと雖も，同じく一個の人間存在としての大塚氏に対して，その主体的営為としての学問について，たとい幼稚なものとはいえ，若干の論及を行うことは，必ずしも僭越ということにもならぬであろう。なお，本稿の場合，大塚史学とは文字通り大塚久雄氏一個人の歴史学的業積の意であって，それ以外のものではない。

ところで大塚氏の著作は昭和10年前後から既にあるわけで，京大西洋史学科学生だった林尹夫氏の戦争中の遺稿「わが命月明に燃ゆ」には，大塚氏の影響と思われる文章があったと記憶する。しかし林氏とほぼ同世代に属するとはいえ，私が大塚氏の画期的な研究に接し得たのは，敗戦直後のことであった。その衝撃的ともいえる内容こそは，数ならぬ私そのものにも圧倒的な力を以て影響を与えたのであった。というのも大塚史学の内容はそれ

(1) 本稿は本来圓藤真一教授退官記念号に掲載すべきものであったが，筆者の不行届により間に合わず本号に掲載していただくものである。非礼をお詫び申し上げる次第である。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

までの私自身の考え方に革命的ともいうべき変化をもたらしたからである。つまり，太平洋戦争の段階において既に個性的自覚に達していた年令の私が拠りどころにしていたのは「哲学」であり，とくに西田・田辺両哲学を中核とする京都学派の哲学であったといってよい。そしてこれらの哲学から学んだ原則として，第1には人間は無仮定のできるだけ根本的な立場から自らを覚らなければならない，従って第2に主体と客体を対立させて客体がいかに主体によって認識されるかといった対象的認識法を排し，具体的な社会・民族・国家・世界そして歴史の中にある個人という観点から全てを考えなければならぬ，ということであった。「国家理由の問題」，『歴史的現実』，『歴史的世界』，『民族の哲学』，『世界史の哲学』，『社会存在論』，『根源的主体性の哲学』，『政治哲学と歴史哲学』等といった標題がすぐ思い出されてくるが，これらと並んでその歴史的認識を荷うものとしては，歴史学者によって著された『ランケと世界史学』や『政治史の課題』があったのである。そしてこれらの書物で主にとり上げられたのはランケとマイネッケであったことも周知のことである。戦争中，これら2人のドイツ史学を代表した偉大な歴史家の著作が飜訳され，とくにランケの有名な『世界史概観（近世の諸時代について)』，『強国論』そして『政治問答』は岩波文庫に入って，当時の青年学徒たちによって盛んに読まれたことも，ついこの間のことの様に鮮やかに思い出される。勿論この派の議論には当時からいろいろ批判があり，事実その解釈にもやや特異な点があったようであるが，少くとも歴史や歴史学が人間存在の切実な契機として意識され認識されるのに役立った様には思える。

然るにこの様な歴史認識を大きく震憾させたのが，戦時中営営と蓄積され，敗戦前後に大きく登場して来た大塚史学の諸著作であった。とくにその主著「近代欧州経済史序説(上巻)」冒頭の序説の注に「経済史的観点を殆んど欠いてゐるがランケの古典的名著 L. V. Ranke, Die grossen Mächte （相原信作訳，ランケ「強国論」岩波文庫）も亦参照あるべきである。」という文章を見出したことは，1つの大きな驚きであったし，そこで何よりも大塚氏の鮮やかな筆使いによって，18世紀のイギリスの制覇に終る近代ヨーロッパ列国興亡のあととイギリスの勝利の根本原因としての資本主義の成立について明確なイメーヂをもつことができ，歴史叙述の妙味をも満喫することができたのである。いわば「モラリッシェ・エネルギー」を1つの説明原理とするランケの「強国論」の世界を，大塚氏は遙かにリアルに，鋭く，そして説得的に解明して，われわれに示してくれたのである。これはヨーロッパについての歴史知識の内容変化といった類いのものではなく，正に私自身をそれまで規定していた諸契機を霧消してくれたものだったのであった。この様な経過は戦争時代

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

に成年に達していた世代が，敗戦前後大なり小なり体験したことに違いなかろう。換言すれば大塚史学は歴史学に属するものであると同時にそれを超えるものでもあったのである。

然るに，この様に大きな感銘を与えた大塚史学も，間もなく人びとの耳目を聳動させる批判を蒙ったのであった。その論点はもとより多岐に亘るが，とくに当面の論旨にとって重要と思われるのは矢口孝次郎氏のそれであった。氏の批判は(2)，一言でいえば，大塚氏の依拠している文献史料であるアンウィン，ヒートン，マントゥー，マン，ワーズワースらの業績の基本的論旨が大塚氏の所論とくい違っていることを審らかに論証したのであった。このことが当時の学界に大きな衝撃を与えたことは，ちょうどそのころ相前後して発刊された雑誌『思想』325号（昭和26年7月）特集「過渡期の問題」に寄稿している代表的諸家によっても，大きく取り上げられていたことからも明らかである。

しかしながらこのこと自身は，教育・啓蒙といった面では意味があったが，大塚氏自身にとってはさしたる問題にはならなかった，といってよい。つまりもともと大塚氏は，上に掲げた西欧諸家の実証的成果を，別個独自の理論と観点によって批判的に再構成したものであったことは，後に言及された大塚氏による反批判を俟つまでもなく明らかであったからである。従って年少かつ現在より一層無学であった当時の私にも，正確な認識ではなかったが，なんとなくこれは論理的次元の違いではないのかな，とも思えたほどであった。

しかしやがて大塚史学への批判としてさらにもっとも説得的と思われるものが現われた。それは同じく矢口氏によって氏自身の編になる『イギリス資本主義の展開』の第1章として掲載された論文においてである。即ち氏は，大塚氏の主張の最もブリリァントな部分をなす「織元」に関する史料解釈について，大塚氏によって略々中位の「農村の織元」であり，当然のことながらマニュファクチア職場主とされたヂョン・ポーソンなる者が，その財産目録に織機が1台しかなかったところからして，実は到底マニュファクチュアを経営していたとは考えられない，と論断したのである。とくに大塚氏の場合，マニュファクチュアに近代資本主義発展における中枢的意義が与えられている以上，その存在と具体的内容の実証は決定的重要性を有するわけであるから この矢口氏の実証的批判は大塚学説への重要な論点提示といえたであろう。勿論大塚氏は戦前の史料的制約の中で，間接的

（2） 最初にいくつかの雑誌に論文として発表され，のち矢口孝次郎『資本主義成立期の研究』1952年に集録される。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

論証をも含めて最大限の実証への努力を払っているし，また少し後になるが，大塚門下の1人によって事実上の矢口氏への反批判[3]も行われている。とくにこの反批判は，織布工程についてはともかく，紡毛（ないし仕上）工程には明らかにアニュファクチュアが存在していたと指摘し，大塚氏ともども大塚学説の基本線はあくまで貫徹していることを主張しているものの如くである。

しかし客観的に見てやはり矢口批判に対しては，未だ充分反論されつくしてないというべきであろう。事実最近においても次の様な文章が見られる。「いずれにしても，大塚史学体系の根幹をなす商業資本と産業資本の対立は，史実のうえで検証することは困難である。…………問屋制が支配的であった史実にもかかわらず，理論的にはマニュファアクュアが支配的であったことを大塚氏が主張する………。いったい歴史家はまず史料によって史実を明らかにするのが歴史家の使命でなければならない。歴史家といえども理論によって史実をつくり出すことはできないはずである。まして理論によって史実を否定することはできないことは明らかである。[4]」　至極あっさり書かれてはいるが，私にはいろいろな問題があるように思えてならない。

先ずこの文の著者角山栄氏は，あたかも大塚氏の所説が少くとも歴史学の立場からすれば不当であるかの如く述べている。しかし史実の究明をする際何らかの認識主観の存在が必須である。しかもこの主観なるものはいうまでもなく共通性と同時に個別性というものを持っている。即ち前者は論理性というものに関わるであろうし，後者は価値・理論といったものがこれであろう。しかも認識主観がいかなる理論ないし価値に従うかは，さしあたり各自の自由であるわけだから，そして大塚氏の立論が他人に理解できない程非論理的というわけでもなく，学生に読ませると大変よく判るという位論理的でもあるのだから，角山氏の批判に拘らず，大塚氏の立論を否定することなど勿論できるものではない。とすれば，この場合に限らず広く歴史学の内部において議論の帰趨を決するためにも，実証されたとされる内容がどの程度歴史的真実を捉えているかを客観的に確定する方法が求められなければならない。いいかえると，相互に批判し合う場合の共通な一定の枠ないし規準を論者は自覚しなければならない。

この点で先ず第1に，歴史家が前提している価値そして理論なるものがどんなものであり，それから導き出されるいわば作業仮設に非合理的な難点がないかどうかを検討する必

（3）　山之内靖『イギリス産業革命の史的分析』1966年。
（4）『講座　西洋経済史Ⅰ　工業化の始動』25ページ。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

要があろう。次に第2点として，理論ないし作業仮設と確認された史料ないしデータを結びつけて歴史像を刻みあげてゆくわけであるが，そのおのおのについての特徴とくに作業そのものにおかしなところがないかどうか。そして第3点として一定の作業仮設を前提とし実証の作業を通して生み出されて来た歴史像が，同じく他の作業仮設により同様のプロセスを経て刻まれた歴史像と比して，どんな長所と短所を持っているか，以上大体3つの局面について検討する必要があるのではないだろうか。私自身はかかる観点から諸家の研究成果を評価することを今後の1つの課題としたいが，さしあたり大塚史学についていかに考えるべきであろうか。

先ず作業仮設の定立にはいろいろな場合があるであろう。普通歴史学では，作業仮設なるものは，先人の実証的成果のうちから，残された問題点という形で自ら生まれでてくるというのが普通といえようが，しかし「それは本来如何にあったか」を究明するのがその課題であり 実証を旨とする近代史学の祖といわれるランケ史学においてすら，その底に理論さらには思想があったことは，今日の常識である。しかし大塚氏の場合，その理論・思想そして信条がきわ立って明示的であることはことさら言及を必要としない程周知のことに属する。しかし，氏によりしばしば論及され，極めて明快であるとはいえ，その源泉の1つであるマルクス理論については，その解釈に関して既にかの宇野理論との間に対立がある。両者ともマルクスに拠りながら，一がマルクスの完成稿たる資本論第1巻に主として拠るとすれば，他は未完稿とはいえ自らの視角に一致する同第三巻の意義を強調するといった具合に，それぞれの主張を支える箇所が同時に並立して存在するのが資本論の内容であってみれば，要するにマルクス理論に関しては，大塚氏の主張が，例えば宇野理論に対して圧倒的に優位を主張することなど到底できないというのが偽らざる現状であろう。さらに大塚理論にとってマルクス以上に大きな意義をもつものとしてマックス・ヴェーバーがあることもいうまでなく，とくにマルクス・ヴェーバー問題として提示されるものについては大塚氏の独壇場であろう。これについては筆者は何の発言権もなく，以下述べるところも単なる思付き以上を出ないのであるが，例えば「多数の欠点をもつ即興的労作」といわれるヴェーバーの『経済史』と大塚氏の『欧洲経済史』(昭31) とを比較すれば明らかなように，大塚氏のヴェーバー解釈もまた独特のものであり，唯一絶対とは到底思えない。従ってこの点に限っても今後多様な解釈がでて，大塚氏のそれと並立する状況が続くであろう。ただいうまでもなく，大塚氏の場合，その理論仮設はヴェーバーとマルクスに関して何といっても十分練りに練られた解釈に立脚し，しかも氏独自の思想・信条によ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

って強固に裏打されているわけで，区々たる技術的な作業仮設がでてもすぐ微視的に対応するといった類いのものではないであろう。ただいうまでもなく，他の理論仮設を結局は包摂するほど周到完ぺきなといったものではないであろうから，今後大塚理論と相異なる作業仮設や理論が群立する事態が続くであろう。故に少くともこの点では，どこに共通性と差違性があるのか先ず確認することが研究者にとって重要であろう。

次は作業仮設を前提しての実証の作業についてである。普通最初に史料批制が先ずなされる。教科書的常識によれば，これには外的批判と内的批判とがある。この批判作業により確認された史料について解釈が加えられる。そして次いで綜合され，1つの歴史像が造築されることになる。しかし全てこの順序で行われるわけでなく，批判・解釈・綜合が随時融合して行われることは，日日の研究を通しても知ることができる。つまり作業仮設という大前提の下で，多様な形で作業が進むわけである。この点大塚氏の場合，自己の作業仮設ないしテーゼを実証するため，直接的・間接的史料を最大限に駆使し，また全ゆる論証のテクニックを使って，歴史像を刻み上げている。ただ一面その論証ないし実証が普通の歴史学の常識からは異例ではないかとの印象を与えることがある。しかしその場合でも論証が不合理だというのではない。それどころか学生に読ましてみても，大変論旨明快でよく判るという。「マニュファクチュア」問題に関する3部作の論文が例えばその例としてあげられよう。その手法は『序説』における論証と同じく，反対説を主張する根拠となるデータが実は大塚説のいわゆるマニュファクチュア遍在説を逆に示すものだという，ある意味で最も大塚氏の持味を示した類いのものである。何度もいう様に綿密周倒な議論であり，大塚氏の観点よりすれば当然すぎる必然性をもっている。しかし例えば数字に基く推論がある。読んでみて理解できないわけではない。にも拘らず何となく空漠という感じを拭うことができない。あるいは歴史的証明ということに果してなるのだろうか，という感じを捨てることができない。

この感じなるものは，あくまで何の意味のない感じなのであろうか。それとも何か根拠のあるものなのであろうか。曽てわれわれは若き時始めて『序説』に接した際，ここに正に近代ヨーロッパの歴史そのものがある，として深く感動した。しかしそれはやはり歴史的真実ではあったとしても，ヴェーバーのいう如く一個有限の視点から観たものとして，所詮トリヴィアルなものであったのであろうか。歴史の広く深く暗い流れは大塚氏が彫身る骨の努力ののちに照し出し得た水脈を大きく包んでうねっていたのであろうか。こんな思いが年を重ねるにつれて強くなってくるのを押えることができない。とすると私のなか

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

に，大塚氏が否定して止まぬ宇野理論の３段階論が新しい色合いを帯びて新たにクローズ・アップしてくるのを感ぜざるを得ない。つまり大塚史学の次元は宇野理論における段階論に属するものと考えられ，所謂歴史・現状分析は少なくとも段階論より個別性至多様性を多く含む領域と考えられるべきではないだろうか。かく考えれば，大塚史学がもつ史実に対する選別性，それが時に示す抽象性といったものが理解できるように思える。この点中村隆英氏が戦争期の日本経済の研究について経済の理論的把握より fact-finding の意義を強調しているのも[5]，この点に通ずるところがあろうか。

叙上のことは，大塚氏が正に対象とした近代ヨーロッパ列国興亡の歴史，いわゆる「強国論」の時代についても，大塚学説の視点以外にもなお最小限検討すべき点があることを示唆するのではないか。とくにスペインやオランダの興亡について大塚学説による解明以外につけ加えるべきことはないのであろうか。とくにオランダについては大塚氏によって近代日本との共通点が強調されている[6]ことは一層この必要性を私に痛感させる。現代日本経済において外国市場の意義が案外小さいという説が一方にあるだけに，とくにこの点の検討を必要とするであろう。そしてこの点は更に拡大延長していえば，国家と経済の関係に関し新しい視点を要請しているものとも考えられる。ヴェーバーにおいてはその処女作『国民国家と経済政策』以来国家の問題は常に彼の議論に見えかくれしながら一貫して存在し続けていたといってもよかろう。然るに大塚史学においては，国家は経済の下にほとんど埋没して，たかだか国民経済の名の下に登場するにすぎなかった様に思える。戦争中高唱され敗戦とともに消えた政治的範疇である国家が再度新しい観点からとり上げられる必然性はないのであろうか。

(1980.12.21)

（5） 書評　東大社研編『戦時日本経済』(ファシズム期の国家と社会２) 史学雑誌88編12号67ページ

（6） 大塚久雄『歴史と現代』1979年とくにⅠの29。